

OBI 後援会・同窓会 NEWS LETTER



No.40

2016年4月発行

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル2F TEL.03-3296-1005 FAX.03-3296-4641 発行者 藤原 湧夫 編集者 有田 貞一

気持ちを一つにしてOBIを

OBI 後援会・同窓会 副会長 戸川 偕生 [11 期生]



OBIとOCCが統合して2年になり、その歩みも軌道に乗ってまいりました。その後を追うようにOBI後援会とOBI同窓会が統合し、「OCCお茶の水聖書学院後援会・同窓会」となって、間もなく1年になります。

後援会と同窓会が一つになったことにより、すっきりした形になったという印象です。

もともと、後援会と同窓会がどのような働きをしているのか、どこが違うのか、なぜ似たような組織が二つあるのか、はたから見ると判然としない面がありました。

かく言う私がそういう思いを持っていました。

私は2004年に卒業いたしました。卒業と同時に自動的に同窓会の一員となり、ニューズレターや同窓会の案内を頂くようになりました。ただ、後援会については、後援会が存在していることは知っていても自分には関係ないという思いでした。

卒業してから研究生としてOBIに通っているうちに、同窓会に関わるようになり、もう一つの組織、後援会の働きのことも知るようになりました。

後援会はOBIを資金的に支えるという重要な働きをして来たことがわかりました。

OBIにとって無くてはならない組織であったということです。

OBIは経済的に厳しい状況が続いていますので、同窓会も毎年OBIのために献金をしてまいりました。

私はその後、後援会にも関わるようになり、同窓会と後援会両組織の働きを内部から知ることが出来ました。

後援会の会員はほとんどが同窓生で、同窓会員であるということもわかりました。

また、後援会発足の理由も知ることが出来ました。

かつてOBIが存続の危機状態になった時、同窓生の一人が私財をはたいて窮地を救ってくださり、そのことをきっかけとして、個人ではなく組織としてOBIを支えて行くことを目的に後援会が組織され、それに賛同した同窓生有志が毎月献金をして支援金を積み立てて後援会の働きを続けて来てくださったと

いうことでした。

現在、同窓生も200名近くまでになり、同窓会は大きな組織となっています。

そのような状況から、後援会の役員の方は数年前から同窓会と一体化したら良いのではないかと考えておられたようです。

私も同窓会と後援会両方にかかわった者として、一体化は意味のあることと言うより一つの組織として活動すべきではないかと思うようになっていました。

そこで後援会と同窓会それぞれが内部で話し合い、その後、三浦喜代子後援会長と有田貞一同窓会長と役員が同席しての話し合いを持ちました。

結果、一体化することに合意いたしましたので、並行してOBI側の意見も伺いながら一体化の作業を開始し、昨年5月18日の同窓会総会、後援会総会において後援会と同窓会合併の案が議題として出され、双方の総会で承認を得ました。

そして1年、その間、事務の引き継ぎなど手間のかかることもありましたが、すっきりした形に収めることが出来ました。

新しい組織の会長には、有田貞一同窓会会長に就任していただきました。有田会長にはこの1年合併上の諸課題を精力的にこなして頂きました。

新組織「OCCお茶の水聖書学院後援会・同窓会」の主たる目的は、後援会の目的であった「経済的にOBIを援助する」ことを第一に、同窓生の絆、OBIを思う方との絆を大事にしつつOBI愛を持ち続けていただくことです。

OBIは、教会のために、キリスト教界のために、神様が必要とされる存在であると確信しております。

主の働き手を育てるOBIを、私たちは主の愛に応答する愛を持ってサポートしてまいりましょう。

「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」

ピリピ2:2

「秋のコンサート」観客席から

1期生 三浦 喜代子

教会音楽科の先生方全員による「コンサート」は、OBI開闢以来の快挙ではないでしょうか。またまたOBIの歴史に出来事が起こり、記念の一項目が新しく書き加えられたのです。こうした企画へと導かれた主の聖名を心からあがめ、感謝します。

案内のチラシをいただくとすぐに我が教会の兄姉に宣伝しました。参加した数名が口々に熱い賛辞を連発、来年もぜひ誘ってと乞われました。

出演の諸先生方はOBI以外でも活躍され、ご多忙な日々にありながら、草創期から今日まで熱心にご奉仕してくださっています。

観客席に座ると、25年間のOBIが鮮やかによみがえってきました。創立者の故増田誉雄学院長はたいへん音楽を愛され教会音楽にも力を注がれました。初期の頃、軽井沢の夏期スクーリングではコーラスのレッスンがあり、聖書科の私たちも輪の中に飛び込んでご指導いただいたことがありました。また、時々、八階のチャペルで先生方のミニ・コンサートが開かれました。OBIにはいつも賛美の空気が流れていました。第一回の卒業式には聖書科と音楽科12名ずつ同数が、ガウンに身を包んで卒業証書を拝受したことなど懐かしく思い出しました。

さて、この度のコンサートではチラシに謳われているように《偉大な作曲家による信仰の歌》が演奏されました。演奏曲目を飾るバッハ、ヘンデル、メンデルスゾーン、ドボルザーク、リストは、世に有名な音楽家だけでなく、信仰者として神様からの賜物を用いてすぐれた信仰の曲を創りました。お馴染みの音楽家たちが同じ信仰の上に立っていたかと思うと親しみと尊敬の念が増してきます。その曲を、今、信仰に生きる先生方が演奏して



くださるのです。拝聴する私たちの心はいやがうえにも感動し、天に引き上げられるようでした。

近藤はるみ先生はバツバカンタータ82番から「われは満ち足れり」をアルトで歌われ、内藤真奈先生は「前奏曲とフーガ」BWV552のオルガン演奏を、植木朋子先生はメゾ・ソプラノでヘンデルの《メサイヤ》から2曲、メンデルスゾーンの《エリヤ》から2曲を賛美されました。

斉藤とし子先生のオルガン曲は私にとっては初めてで、強く耳底に残りました。後年カトリックの神父として神に仕えたあの偉大なリストがバツバの曲を編曲したものでした。曲はカンタータからとロ短調ミサ曲からの変奏曲でした。

最後に遠藤かおる先生がソプラノで5曲賛美されました。厳しい病との戦いのさなかでの演奏でした。ドボルザークの3曲とマロッテから2曲で、最後の「主の祈り」には胸が震え、涙がこみ上げました。

『詩と賛美と霊』による演奏のチャンスがこれからも連続しますようにと願い祈ります。最後にOBIがいよいよ祝され、大胆に主の働きを進められますように祈ります。



聖書の学びから

6期生 東 利雄

イエス様と弟子たちはヨルダン川の向こう岸でバプテスマを授けられた後「サマリヤを通過していかなければならなかった」(ヨハネ四・4)(ユダヤからガリラヤへの最短コースだったので)。スカルの婦人とヤコブの井戸のそばで交わした会話は、興味深いと共に忘れがたいものである。サマリヤ人のうち多くの者が婦人のことばを聞いてイエスを信じた。請われて二日間、町に滞在しメシヤと神を礼拝する時が今、来たと聞いたであろう。さらに多くの人々がイエスのことばによって信じた。

そして、彼らはその婦人に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」◎kosmouは地上の人民、人類の意味である。イエス様は父なる神に背いた北イスラエル国のことはすべてご存じである。ソロモン王の世継ぎに、家来であったヤロブアムは名乗りを上げ、イスラエルの十部族を率いて独立し、北イスラエルとした。主に対して罪を犯し（イスラエルの人々の前から追ひ払われた異邦人の風習に従い、偶像に仕えた）。この悪習慣は十八代続いた王のすべてがおなじであった。紀元前七百二十一年、サルゴンⅡ世により征服されてアッシリヤへ捕囚とされた。残った民とアッシリヤが連れてきて住まわされた民族が定住し、やがてイスラエルの生き残りの人々と結婚して、独自のユダヤ教を発展させた。サマリヤの婦人のことばからイエス様の時代には、先祖が建てたゲリジム山の神殿で礼拝を続けていた。ユダヤ人は、これらのことからサマリヤ人を忌み嫌っていたのです。このような関係のなかイエス様は分け隔てなく平等に地上の人類を愛しておられたのである。この私も同じように愛されているのです。信仰は福音を聞いて知り、受け入れて信頼し服従することにある。聖書を学ぶことを続けていくなら、その後、聖書にある善きサマリヤ人の物語が生まれていることに感動を覚える。一生、自分の傍らに置き神様がどのように地上の人類を愛しておられ、終わりの日に与えられるまで信仰を持ち続けたいと思います。故増田先生が〇BI学びの時間にお話された「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。」(Ⅱテモテ四章)このような信仰を持つ者になりたいものです。



主のお導きの中で

20期生 鬼京 由紀子

神棚のある普通の家庭に育った私が、初めてイエス・キリストのお名前を知ったのは、12,3歳の頃読んでいた伝記小説の中でした。イエス・キリストは「純潔で崇高な愛の方」ですが、そんな方は人間である筈がなく架空な方と思っていました。

20歳の時、いつものように出かけた父が、夕方には死の床に横たわっている姿を見えるということを体験をいたしました。

愛する父の突然の死は、20歳の心に耐えがたい喪失の苦しみとなり、生きる力さえ奪っていきました。半年経った頃にやっと書けた日記にその頃の心情が綴られています。

— 期末試験も三日後に迫っているのに、私はどうしたというのでしょうか。何冊もの分厚い本を前に私は何を考えているのでしょうか。すべてが無意味、学問も自然も娯楽も、そして人間さえも。一体「生」とは何?生きること知らない私に、学問なんて何の意味があるのでしょうか。私は魂のぬけがら、だれが私を救ってくれるのでしょうか、新しい息吹きを吹き込んでくれるのでしょうか。

でも、お願いします。私に再び魂を、生きる力を与えて下さい! —

その悲しみを心の奥に封じ込めて大学を卒業し社会人となった私は、人目には「いつも楽しそうで悩みのない人」として生きてきました。

やがて結婚をし、家族が出来、年齢を重ね、平凡な日々を送る中で、いつの頃からか「何かに追いかけられているような不思議な気持ち」を感じるようになっていました。「何か」それは日常生活を破壊するようなざわめきではなく、サワサワと心の中を吹いて、なんとなく落ち着かない感覚でした。それは何年も続いていました。

2005年の夏、主人が9カ月の闘病生活の末がんで亡くなりました。

これをきっかけに、娘夫婦のすすめで、それまで住んでいた千葉から娘夫婦の住む埼玉県に転居いたしました。

クリスチャンである娘夫婦が通う坂戸教会に、私も誘われるままに通うようになりました。

当時、私は三浦綾子、椎名麟三の本を読んでおりましたので、キリスト教用語の意味を知りたい思いがありました。知りたいことが次の礼拝説教で知らされることが度々あり、礼拝出席が楽しみになっていました。

数カ月経った頃、村上宣道先生とお話する機会があり、その時、それまで「架空の人」であったイエス・キリストが実在の方で、人格を持たれ、人間の姿でこの地上を歩まれたことを確信することができました。

私の心の中に胸のつかえがとれたような安堵感とともに静かな感動が広がりました。

2007年5月13日、母の日礼拝の後、村上先生は私を信仰告白へと導いてくださいました。洗礼式の日も決めてくださいました。

洗礼式の前日、私は改めて自分の罪を紙に書き出そうと思い机に向かった時、自分中心の罪深い姿に戸惑ってしまい、書くことが出来ませんでした。

気持ちの整理がつかないまま、手元にあった一冊の本を開いた時、そこに「救いの条件」が書かれていました。

「救いにとって人間の側に求める条件はまったくないのです。救いは無条件に与えられているのです。救われるに相応しいものが私共の中に全くないにもかかわらず、神より無条件に一方的に差し出されている救い、これが聖書に示されているイエス・キリストによる救いです。」

その一文を読み終えたと同時に、窓際をコーッとという低い音とともに、空気圧が走り、次の瞬間、机の前の壁に上半身の人影が映し出されました。「あ！イエス様」私は心の中で叫びました。涙があふれ出て何も書かれていない紙の上にこぼれ落ちました。差し出された手が瞳の奥にいつまでも残っていました。

翌2007年6月3日、村上宣道先生お祈りくださって、郷家一二三先生より洗礼を授かりました。私にとってこの上ない恵みの受洗でした。

受洗後数日経って、私は「追いかけている感じが全くなくなっていることに気がきました。

「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしはあなたがたにわたしの平安を与えます。」

(ヨハネの福音書14:27)

みことばとおり、心に平安が与えられました。私の心の空洞を吹いていた風は静まり、神の愛に満たされたのです。

人生の終わり近くに頂いた数々の恵み、神様の時を感謝いたします。

OBI継続研究コースに参加して 「目からウロコが落ちる」

19期生 倉内 一寿

私は2015年度「OBI継続研究コース」に出席して、大変恵まれましたので、その一部をご報告いたします。従来はOBIの卒業生が中心でしたが、今回からは公開講座となり、OBI卒業生以外の方の参加もあり、出席人数は従来よりも大幅に増え、活気を呈しております。毎月一回（8月と3月を除いて年10回）、第3木曜日（13:30～15:00）に実施されております。

講義内容は、OBIの教師陣を中心に10名の先生方が、その専門分野のテーマに合わせてお話ししてくださいました。聖書神学、教会史、牧会学、伝道説教、礼拝における讃美など、本当にバラエティに富んでおります。その中から、私が印象に残ったものを、いくつかご紹介いたします。

堀肇先生の「信仰と人格形成」では、本当に多くのことを教えられました。普段あまり気づかず、何気なく言っていることにも、人を傷つかせることがあること。人のためと思ってやっていたことが、実は自分のためであったということ。信仰が自分の夢を実現させるものであってはならないことなど、耳が痛いことが沢山ありました。

また、信仰を持っている人でも精神的な問題を持っている方が多いこと。牧師や役員の中にも多くいることを聞かされ、びっくりしたものです。

またパーソナリティ障害についても学びました。人から脚光を受けていないと面白くない、褒められないと面白くない、自分が重要視されないと面白くない。これを自己愛性と言うそうですが、なんか私自身のことを言われているような感じがして、深く反省させられたものです。聖書の読み方、デポジションのあり方が大切であり、魂の深いところまで、光を当ててもらう

必要のあることを感じました。

次に、大坂太郎先生の「聖書解釈学の要点」では、目からウロコが落ちる体験をしたことがいくつかありました。例えば、箴言29:18に「幻がなければ、民はほしいままにふるまう。」とあります。私はこれまで、この箴言29章のみ言葉から、ビジョンを持つことの大切さを教えられてきました。幻をビジョンと捕らえ、聖会などの標語によく用いられてきました。大きなビジョンを持って、しっかり伝道計画を立て、ともに頑張ろう、とよく言われたものです。

しかし、大坂先生から、ここの「幻」は18節後半の「律法」との関連で理解されるべきであり、ビジョンではなく、預言者を通して神さまが与えるメッセージとして捕らえるべきであること、つまり聖書のみことばに従うことの大切さを教えられました。他にも沢山教えられることがあり、さらに深く、幅広く、いろいろな角度から聖書を学びたいと思いました。

丸山悟司先生からは、アウグスチヌスの原罪論の根拠となった聖書箇所、ローマ5:12の解釈について、大論争があったことを学びました。アウグスチヌスと言えば、その後、宗教改革のルターやカルバンに大きな影響を与えた人物であり、とても興味を持って受講しました。しかし、その元となるアウグスチヌスの原罪論が、ラテン語に翻訳するときの誤訳が原因となっている疑いがあると聞かれ、エッ!とびっくりしたものです。

そして、アウグスチヌスの原罪論の影響を受けていない東方教会でもっと人間性が尊重され、人間の自由性、可能性を認めていることを学びました。普段、あまりカトリック教会はおろか、東方教会については学ぶことの少ない私にとっては、やはり目からウロコが落ちる体験であったと言えます。

他の講座でも、目からウロコが落ちる体験をしました。が、裏を返せばいかに聖書知識に乏しいものであるかを思い知らされ、引き続き新年度も「OBI継続研究コース」を受講することに決めました。

なお、大変恵まれた講座なのですが、いかんせん時間が短く、ゆっくり質問をする時間が取れないという声があり、最後の丸山先生の講座は時間を延長して質問の時間を十分とることができたのは大変良かった

です。新年度からは、質問の時間を十分取れるよう配慮すると藤原学院長のコメントを付け加えておきます。

研究コースへのご招待ご案内

コーディネーター 中島 総一郎 [13期生]

OBI卒業生の一人でも多くご参加いただきたく、継続研究コースを紹介させていただきます。

研究コースは、OBI開学当初から「研究科」の名称で継続されてきております。聖化について、他宗教について、キリスト教迫害史についてなど、それぞれの年度で注目された課題を取り上げてきました。2015年度は、授業を持つ講師から「旧約聖書を学ぶ意義」など講義の総括的な核心や関係を話していただきました。2016年度も年10回の全講義の講師陣が変わって、それぞれの分野の得意とするテーマについて話していただき、質疑応答によって理解を深めていただこうと予定しています。

講義テーマは、4月から順に挙げると、「初代教会と新約聖書の成立」、「初代教会とパウロ神学」、「キリスト者と性」、「キリスト者と政治」、「キリスト者と労働」、「教会とリーダーシップ」、「ヘンリー・ナウエンの世界」、「ポール・トルニエの世界」、「バハ時代を受難礼拝」、「聖書の世界に触れる楽しさ」です。事務局に置いてある別刷りの「ご招待」パンフレットをご覧ください。

2016年度研究コースの従来から改正された点は、質疑応答時間の長さです。受講生の皆様から「質疑応答の時間が短く、消化不良になったり、確認したいことが出来ずに終わってしまう」、「もう少しザックパンに意見交換できる位の時間を採れないものか」との要望がありました。藤原学院長の尽力とOCCの取りはかりで、費用の加算をせずに15時30分まで部屋を使ってよい許可を得ました。講義を75～80分間で切り上げていただいた後、40～45分間質疑応答ができるようになりました。質問が出なくなった時点で、15時30分前であっても、その日の講座を終了とさせていただきます。

研究コースの開催日時は、8月と3月を除く毎月第3木曜日13:30～15:00(～15:30)。

受講料は、半期(5回)で10,000円、公開講座となっ

ており、OBI卒業生ではなくても特定講座のみどなたでも受講できます。その場合の聴講料は1回2,100円です。

会場はお茶の水クリスチャンセンター 416号室です。

各回の責任アドバイザーは藤原学院長、研究コースのまとめやくとしてのコーディネーターは中島です。

OBI継続研究コースへの皆様の振ってのご参加を、心よりお待ち申し上げております。

「OCCお茶の水聖書学院 後援会・同窓会」の働きと皆様へのお願い

会長 有田 貞一 [3期生]

主の御名を賛美いたします。

昨年5月18日に、OCCお茶の水聖書学院同窓会とOCCお茶の水聖書学院後援会とが一つに統合され、「OCCお茶の水聖書学院後援会・同窓会」となり、スタートしました。

会員は、正会員と賛助会員に分かれます。正会員は卒業生とアドバイザー（学院長）で、賛助会員は、OBIの働きに賛同する個人（OBI教職有志、OBI学院生（聴講生も含む）有志、OBI外の個人等）、および団体（教会、企業その他）です。

主な働きは、①卒業生の親睦を深めて、互いに励まし合い、祈り合う同窓会の働きと、②OBIを経済的に支援していく働きです。特に、②項の働きのために、賛助会員および正会員による維持献金と任意献金の増加を願っております。献金の方法をまとめますと、次の3つになります。皆様のご協力を心からお願いします。

(1) 同窓会費：年3,000円 正会員有志：振込用紙をご利用ください。

(2) 維持献金：ゆうちょ銀行への自動振込み方式。

対象は、正会員有志、賛助会員有志。

維持献金申込みご希望の方、金額変更される方は、OBI事務局にご連絡ください。

TEL：03-3296-1005 FAX：03-3296-4641

(3) 任意献金：対象は、正会員、賛助会員です。

(下記要領で、お振込みください。)

A. ゆうちょ銀行から振込みの場合

振込先：ゆうちょ銀行

記号：10190

口座番号：78350231 普通預金（通常貯金）

加入者名：OCCお茶の水聖書学院 後援会・同窓会

B. ゆうちょ銀行以外から振込みの場合

振込先：ゆうちょ銀行

店名：〇一八（読みゼロイチハチ）

店番：018

預金種目：普通預金

口座番号：7835023

加入者名：OCCお茶の水聖書学院 後援会・同窓会

（オーシーシーオチャノミズセイシヨガク
インコウエンカイ・ドウソウカイ）

編集後記

同窓会、後援会が統合して間もなく一年になります。統合されるきっかけと統合後のことについて、統合に関わった者のひとりとして、感じたことを巻頭言の形で書かさせていただきました。

組織として一つになったことはベストの選択であったと、今あらためて思っております。OBIとの協力関係が更に強くなったことを感じています。昨年秋のOBI主催のコンサートでは、早速その効果が見られました。予想を上回る大勢の方に参加していただきました。その様子を後援会会長であった三浦喜代子姉にレポートしていただきました。

今号は、地方で活躍しておられる同窓生の一人東利雄兄に投稿していただきました。救いの証しを鬼京由紀子姉に書いていただきました。また、昨年好評であったOBI継続研究コースの新年度の予定についてコーディネーターの中島總一郎兄に、研究コースの様子を昨年聴講された倉内一寿兄に書いていただきました。

OBI後援会・同窓会が、OBI発展のために、さらに寄与できる存在であって欲しいと思います。

皆様の日々のお祈りにお加えください。

(戸川)